

フクロウについての考察

—ことにシンボル・モチーフとしてのフクロウ—

小 野 泰 正

1 緒 言

古来シンボルや紋章には、動物が象形され、使用されたものが少なくない。最近ではそれらをさらにデザイン化して、使用する傾向がうかがわれる。

日本の紋章に描かれている鳥類の代表的な種は、タンチョウ *Grus japonensis* である。丹頂は、「鶴は千年」といわれ長寿のシンボルとされてきた。盛岡南部藩の家紋の「向鶴」は、その鶴紋の一つである。この「むかいづる」は、また「双鶴紋」といわれる。伊藤（1969）はこれと酷似する紋を、「上下対い鶴菱」としている。現在「向鶴」の紋章は、南部古代型染めの模様や、また盛岡市内のホテルがデザイン化し、慶事に使用する模様としたもの、などにもみられる。これは、「向鶴」が雌雄の鶴を描いた紋章であることにちなむと推測される。

鶴紋に次いでタカ（鷹）の羽を用いた鷹羽紋や鷹を用いた紋、雁紋、さらに鳩・千鳥・雀が紋章とされている。仙台伊達藩の「竹に雀」も、雀紋の一つといえよう。また、にわとり（鶏）、オシドリ（鴛鴦）、そして想像上の鳥の鳳凰も紋章に使用されている。

海外では、ハクトウワシ *Haliaeetus leucocephalus* (Spread Eagle) が、アメリカ合衆国の国鳥として有名である。白頭ワシは、口にはラテン語の「多数の統一」のモットーをくわえ、右足に月桂樹の枝、左足には13本の矢をつかんでいる。

紋章の起源は古く、古代ヨーロッパに遡り、部族と部族が戦う時、敵と味方を識別するしるしが必要であったことが起源という。中世には、戦士・騎士を識別するために盾にシンボリックな図を描いたものが用いられ、以後の盾形の紋章のもとになったとされている。ライオンは、こうした盾形の紋章で有名な図柄である。

これらの事柄は、昔から人々がそれぞれの鳥類や獣類に対して、どのような感じ方や考え方をしていたかを考えさせる。荒俣宏氏はその労作「世界大博物図鑑」全5巻の中の4「鳥類」に、豊富で多彩なそして文化史な内容を収録した。ただしこの大作も、筆者が本稿で取り扱うような宮沢賢治とフクロウの童話作品や、これをモチーフとしてことに岩手で展開している最近の内容には及んでいない。

筆者はこれまで、動物とその動物が生息する地域の人々のさまざまな関わりを理解することが、生物種の保護とその生息地の環境保全にとって重要であると考え、関連する資料を収集しつつ考察してきた。その中でことにフクロウは、洋の東西を問わずいわば文化史的な内容に富むと考えてきた。そして1996年には、宮沢賢治生誕百周年を記念するさまざまな行事が、岩手県や花巻市を中心としながら、いわば全国的な規模で開催され、これと関連して特にフクロウのデザインの商品や、シンボルとして宮沢賢治のミミズクが、数多く登場するようになった。

筆者はこの機会に、フクロウについての考察を取りまとめることとした。

2 フクロウとミミズク

種としてのフクロウ *Strix uralensis* は、フクロウ目 (Order : Strigiformes), フクロウ科 (Family : Strigidae) に属する留鳥である。本種の英名は Ural Owl で、国外ではユーラシア大陸の温帯から亜寒帯にかけて、広く棲息する (高野 : 1985)。

頭部に“耳”があって、ミミズクとよばれる鳥は、同様にフクロウ科に属する。ただし、単にミミズクという和名の種はいない。ミミズク類のいわゆる耳は、頭部にある羽毛の一つで、耳羽 (ear-tufts), あるいは耳角とよばれる。

日本では両者を区分するのが通例で、国語辞典でも「みみずく」はフクロウ科の猛禽で、頭に耳のような長い羽毛のあるものの総称としている。

しかし、フクロウとミミズクの区別は厳密ではない。その事例は、次のとおりである。

北海道東部に棲息するシマフクロウ *Ketupa blakistoni* (英名 Blakiston's Fish Owl) は、日本フクロウ類で最大の種であるが、耳羽があり、いわばミミズクタイプである。これに対して、日本に夏鳥として渡来するアオバズク *Ninox scutulata* (英名 Brown Hawk Owl) は、耳羽がなく丸い頭部で、いわばフクロウタイプである。

このようにフクロウとミミズクは、厳密に分けられてはいない。英語においても、ミミズクに a horned owl があるが、上記の種のようにhorn のある種でも、逐一これを用いて区別してはいない。和名 ワシミミズク *Bubo bubo* でも、英名は Eagle Owl (Hamomond and Everett:1980) である。

日本では、種としてのフクロウが相当に広く認識されており、これがミミズクとの区分の基盤になっている、と考えられる。これに対してミミズクは、その他の、耳羽をもつ“フクロウ類”をくくめて呼ぶ総称であるといえる。

ミミズク類には、以下のような種がある。

コノハズク *Otus scopus* (英名 Scops Owl) は、声の仏法僧として有名な種で、耳羽があり、夏鳥として渡来する。コノハズクはかつて“声の仏法僧と姿の仏法僧”の話題で全国的に有名になった。本種は1976年に岩手大学農学部附属滝沢演習林内に棲息し、筆者が顧問の岩手大学野鳥の会会員と確認したが、現在では各地域とも声を聞くのが容易でない。

この種より少し大形のオオコノハズク *Otus bakkamoena* (英名 Collared Scops Owl) は留鳥で、前種よりはるかに接する機会が多い。最近筆者は、岩手県胆沢郡胆沢町の西部山地内で、夜間、林道で活動する本種を、1ラインセンサスで3個体目撃したことがある。

コミミズク *Asio flammeus* (英名 Short-eared Owl) は、冬の水田地帯や広い河原などに、冬鳥として渡来し棲息するが、耳羽はあまり目立たない。

フクロウ類は、フクロウ科に世界で28属124種 (Coomber:1990)、メンフクロウ科に2属12種10種 (Coomber:同) があり、捕食者として有名である。メンフクロウ類は真正フクロウ類より眼が小さく、顔面がハート型である。英名は Barn Owls で、barn は農家の納屋・物置きであるから、納屋フクロウとなる。これは本種の、農家の納屋に営巣する習性を反映している。ただしメンフクロウ類は、日本には分布しない。

さてフクロウは、かつて我国のある自然保護のキャンペーン的なポスターに、自然度の最も高い鳥として最高の10点とされたことがある。フクロウは高木のある樹林に棲息し、大木の樹洞に営巣して繁殖する種であることから、この評価は妥当である。その後、日本鳥類保護連盟は、アオバズクを自然度最高の10点としているが、夏鳥である。

最近、大木のあるよく茂った森が各地で減少しているため、フクロウの棲息個体数が減少

していると考えられ、ことに都市近郊では本種の特有の声を聞く機会はほとんど無い。

このような傾向の中で、市街地直近の場所でも岡があって森が茂り、大木が残存する神社境内林は、本種の棲息場所として貴重である。筆者はかつて、このような事例として、岩手県一関市の蘭梅山と配志和神社を記述した(小野：1982)。

遠藤(1987)は、岩手県宮古市常安寺における本種の棲息を記述している。

ただしフクロウは、秋期から冬期には、より人里近くにまで出現することがある。筆者は大学院集中講義で滞在する千葉大学園芸学部(千葉県松戸市)の環境緑地学科応用動物昆虫学講座で、最近1月、本種が都市近郊の公園に出現したため注目され、新聞社から解説を求められた事例があった。

写真1は、宮城県加美郡中新田町で、本種が耕地まわりに出現した事例である(下山安：日本野鳥の会宮城県支部：撮影)。フクロウが冬の季語(旺文社：1989；国語辞典)であるのは、特有の鳴き声を聞く機会より、上記のように冬期に人里近くで見る機会が多い本種の習性が反映していると考えられる。「鳥の文化史」には、冬、「梟のむくむく氷る支度かな 一茶」が引用されている。俳句では木菟を区分して、同じ冬の季語としている。

なお高野(1991)は、記紀に登場する鳥について述べたなかで、特に仁徳天皇の鳥に関する記述が多いこと、崇神天皇家の産屋にミミズクが飛び込んだが、大臣の武内宿禰家に飛び込んだミソサザイと交換し、大臣の子に木菟宿禰(ずくのすくね)の名がつけられたこと、その後起こった争いは、天皇の名がミソサザイで弱かったためとの日本書紀の内容を取り上げた。そのなかで氏は、ミミズクはくちばしも爪も鋭い夜の猛禽で、知恵者・哲学者のイメージもあったとした。

狂言の梟山伏は、梟にとりつかれて奇声を発する病人を山伏が直そうと祈り、自分が発しはじめる(広辞苑)。

なおフクロウは、前記の家紋や紋章には見出していない。

3 宮沢賢治とフクロウ

周知のように宮沢賢治の作品には、「よだかの星」のヨタカをはじめとして、いろいろな鳥類が登場する。フクロウが登場するのは、「二十六夜」・「かしはばやしの夜」等である。国松俊英・藪内正幸の両氏は、財団法人日本野鳥の会誌「野鳥」に「宮沢賢治の野鳥図鑑」を連載した。両氏はその連載第2回に“フクロウたちの夜”を記述し(国松・藪内：1995；'96)、ことに「二十六夜」をとりあげた。

宮沢清六氏は、賢治とミミズク・フクロウについて特段の取り扱いであることがうかがわれる。このことは、花巻市胡四王山の宮沢賢治記念館の正面入り口前に建てられた、「二十六夜」に由来する「疾翔大力像」と名付けられた、特別のフクロウ像(写真2)に示されていると考える。館内では、賢治のミミズクに基づくガラスのフクロウペーパーウエイト(写真3)や、特製のフクロウ像(ミミズク像一写真4)が取り扱われている。これとは別に筆者は、数年前、TRAIN VERTと記憶している雑誌で、同氏がある彫刻家のフクロウの作品を入手されたことを知り、この感を深くした。花巻市胡四王山の公園には、ほかにミミズク型の街灯(写真5)や案内(同6)が設置されている。

4 国内のフクロウの工芸品・民芸品

フクロウやミミズクをモチーフとした工芸品・民芸品は各地にあり、これらをすべて取り扱うのは勿論困難であるが、ここでは作品の多い岩手県内と、その他の地域で特徴のある数点を取り上げる。

(1) 岩手県内

岩手県内では、これまで工芸品・民芸品としてフクロウが製作されてきた。これらは、宮沢賢治と深く関連していることは明らかである。さらに宮沢賢治生誕百周年にあたる1996年には、新たな“フクロウグッズ”が増加した。

1) 「フクロウの樹」とブロンズ

「フクロウの樹」(写真7)は、盛岡駅新幹線コンコースにあり、その一角は“フクロウ広場”とされている。これは新幹線開業を記念したモニュメントで、鈴木貫爾氏(盛久)のデザインになる。鈴木盛久工房は旧南部藩御用鋳物師という。

「フクロウの樹」は岩手県花の桐の実のレリーフで構成された球体の上で、フクロウとリスが遊んでおり、宮沢賢治の童話の世界と、杜の都盛岡のイメージを重ねて表現している。

写真8は、そのブロンズのエスキス(小形)である。

ただしこの作品に添えられた詩のシマリスは、本州以南には自然分布がない。日本におけるシマリスの棲息地域は北海道であり、動物地理学上の分布境界線の津軽海峡すなわちブラキストン線が当てはまる。しかし盛岡市内では、かつて岩手公園の不来方城まわりでシマリスが見られ、話題となったことがある。中村(1987)は、1970年代初めの秋に気がつき、以後'76年には4つがい以上が棲息したこと、しかし'84年以後は見られなくなったことを記述している。これらは、飼育されていた個体と考えられるが、詳細は不明である。最近、阿部ら(1994)はチョウセンシマリスが県南部等で野生化しているとしている。

フクロウの鉄製品は、県南の花泉町の工房でも製作されており、賢治の「二十六夜」にちなむと添書されている。

2) 鉄器

県内には、鉄製のフクロウが多い。

福籠香炉と名付けられた写真9は、盛岡市内で入手し、取り扱い店が県内の作品としたもので、添え書に、古代中国では、梟は強に通じて非常に強いという意味があり、梟名(きょうめい)とは武勇の誉、梟将とは勇ましい大将といわれることをあげ、福が籠もる幸運の香炉としている。フクロウの太く安定した体型は、安定した香炉を可能としている。

岩手県内では、以前からフクロウをモチーフとした製品が造られてきた。南部鉄器の朱肉入れは、太いフクロウの体型をよく活かしている(写真10)。ほかにも南部鉄器の製品には、腹部が灰皿の置物、ペーパーウエイト、栓抜き、ブックエンドなどがある。

3) 陶器のフクロウ

最近盛岡市内の店頭には、宮沢賢治生誕百年ということから、多くの“フクロウグッズ”が並んでいる(写真11)。ほかにここには、大きさに種類のあるマグカップやミルク入れなどの陶器、そして小形の陶器の人形などがみられる。

4) 音のでるフクロウ陶器

比較的 新しい製品であるが、フクロウのオカリナが陶器で造られている(写真12)。色彩的に楽しい作品であるが、説明書のとおり、演奏するには向かない。

東和町の工房で手作りされるフクロウ（写真13）は、「かしばやし夜の夜」のイメージによるという。このフクロウは尾羽のところに吹き口があり、ホウホウという良い音を出す。

5) 和紙面「五郎助」

金ヶ崎町の工房が製作している和紙面（写真14）は、形態は耳羽のあるミミズク型であるが、「五郎助」と名付けられている。この名は、“ゴロスケホッホウ”とききなされるフクロウの鳴き声にちなむと考えられる。面は裏張りの技法で作られ、丈夫である。

面には、両眼を開いたもの、閉じたもの、片方だけ閉じたものがあつたが、現在、盛岡の店舗のは通常型である。

ホオズキを利用した民芸風のフクロウ（写真15）は、ほかにプラスチックに封入したものなどが、以前から作られている。

6) 壁面のフクロウ

最近、花巻市内の北上川右岸側に竣工した建設省東北地方建設局岩手工事事務所の排水機場は、宮沢賢治のイギリス海岸直近の場所で、その壁面は川側である。岩手工事事務所は、ここに賢治ゆかりの壁画を描いた。この壁画（写真16）の規模はさほど大きくはないが、建設場所から言って実に適切な配慮であると考ええる。

(2) 県外のフクロウ

フクロウの民芸品には、有名な“すすきみみずく”がある。武蔵野のススキでつくられたこのみみずくは、江戸時代からの歴史があつて、雑司谷鬼子母神で売られ、いかにも郷土玩具的である（荒俣：前出）。

ここでは、特徴のある下記の3点について記述する。

1) 飛騨高山のフクロウ

飛騨高山のある工房では、木版手染めの布地を使用し、いろいろな鳥のマスコットを製作し、ガイドブックにも掲載されている。写真17は、その中のフクロウである。

2) 笹野彫り（笹野一刀彫り）

笹野一刀彫りは、山形県米沢市の笹野観音の祭事で売られて知られ、名高い。サワグルミやコシアブラなどの材で作られ、削りかけの技法が用いられた翼や尾羽が特徴である。

笹野一刀彫りの作品には、フクロウはなかつた。最近筆者は、(財)伊豆沼・内沼環境保全財団主任研究員である柴崎徹博士から、特に笹野彫りの作者にフクロウの製作を依頼し、入手したと聞いた。写真18は、その作品と同じフクロウと推測される。

3) 木彫り製品の例

近年、バードウォッチングが盛んになったことを反映し、バードカービングも増加している。工芸的な木彫りの製品の例とし、ここではエンジュの材を用いて詳細に彫り上げた、北海道のエゾフクロウ（写真19）を取り上げた。この小品は細部まで仕上げられており、両眼まわりの羽毛も国産品には珍しく表現されている。

最近では、国内にフクロウのコレクターが少なくない。仙台市の或るアクセサリ・雑貨の輸入・販売業者は、フクロウ製品が全国的に結構出るといふ。取り扱う店舗では、フクロウが学問や知恵の神（女神）として有名であることを付言するのが通例である。

これらと全く異なる分野の政府刊行物販売店では、現在、ミミズクを印刷した紙袋を用いている。

5 海外のフクロウ製品

1) エジプト

古代エジプト人が言語を表記した書体の一つに、ヒエログリフ (Hieroglyphs) があるが、その象形文字にはフクロウがあり、発音はmである (長谷川ほか: 1994)。エジプトには、この象形文字を印刷したパピルスが (写真20) ある。

2) ギリシャ

周知のようにフクロウは、古代ギリシャのアテネの守護神アテナ (Athena) のシンボルである。アテナはギリシャ神話に登場する女神で、ゼウスの娘であり、技術・工芸さらに芸術の女神とされている。

写真21は、古代ギリシャのコイン (紀元前 500年頃) に描かれたフクロウのレプリカである (丸善・博物館交響楽, Facsimilies, Ltd., USA)。フクロウの右の文字は、アテナの省略形である。このフクロウの絵は、顔盤と呼ばれるフクロウ類の顔面がよく表現されており、両岸まわりの羽毛は放射線状に広がる線で表現されている。

この種はコキンメフクロウ *Athene noctua* (Little Owl) で、日本には棲息しない。コキンメフクロウ属の学名は、この女神の名である。本種は体長が約22cm、翼開長は約55cmで、いわゆる白目の部分が黄色である。本種は、旧北区の温帯などに広く分布し、ヨーロッパにかなり普通なようであるが、アイルランドやスカンジナビア半島などには分布しない。また別亜種は、中国などにも棲息する。

写真22は、現代のギリシャの置物の一つで、コインのフクロウのデザインをうかがわせる。

最近筆者は、アセアン展と称する物産展で、このブロンズ像と酷似する小品を見たが、かなり粗雑であった。

一方では、フクロウをモチーフにした栓抜きなどもある。

なお、製造国は特定できなかったが、古代ギリシャのコインの図柄は、銀製ネクタイピンなどに使用されている。

3) イタリア

フクロウの置物には、イタリア製が多い。このことは、古代ギリシャの女神アテナが、古代ローマの神のミネルバ (Minerva) となったことの反映と考えられる。写真23のブロンズに添付の説明書も、ミネルバがローマの学問・知識そして戦争の神であり、フクロウはこの女神の学問と知識のシンボルであると記述している。女神はまた、知恵と芸技の女神とされる。

写真24はイタリア製で、日本に多く輸入されている。その中央手前は、いわゆる「見ざる、言わざる、聞かざる」で、興味深い。

4) フランスその他ヨーロッパ諸国

写真25は、フランスの陶器の小物である。フランスには、フクロウの笛 (写真26) がある。

この笛は、モリフクロウ *Strix alco* の声が出せるという。

ロンドンでは、木製フクロウを入手したが中国製で、中に順次小型の色彩の違うフクロウが入っており、合計5羽になる。これはフクロウの太い体型を利用している。

日本には、一見竹の皮に似た植物繊維で編んだ、同様により小さいものが中に入るフクロウが輸入され、各観光地で販売されている (生産国不詳)。

ヨーロッパでは、有名なブランドの製品にもフクロウを見ることができる。例えばロイヤル・コペンハーゲンの1974年イヤーズ・プレート (写真26)、SWAROVSKI (オーストリア) の SILVER CRYSTAL (写真27)、銀製ピルケースの蓋の図柄などである。SWAROVSKI は、

日本の鳥類研究者に高く評価される双眼鏡やスコープの製造元でもある。光学器メーカーのZEISSは、“ふくろうの眼”を双眼鏡の広告に用いている。日本の光学メーカーにも、同様の例がある。これらの事例は、フクロウの眼についての人々のイメージを示唆している。

5) アメリカ

写真28は、アメリカのバーボンウイスキーの収集デカンタであるが、動物学者が監修したとある。これはアメリカオオコノハズク *Otus leucotis* (Screech Owl) で、南北アメリカに分布し、美しい鳴き声の持ち主のようである。この添付書には、フクロウは古い民間伝承や、ファンタジー、英知、迷信のシンボルとある。

また、いわゆるブランド物でオイルライターのZippo などにも、フクロウの図柄がある。

そのほか、アメリカ製に限らず、雑貨品的な小物より高級なアクセサリにも、フクロウをモチーフとしたものが少なくないが、本稿では割愛した。

6) 中南米諸国

写真29は、黒陶と考えられる。エクアドルの木製(写真30)は細長い。材料が製品を制約していると考えられる。

メキシコには陶器のフクロウが多く(写真31)、壁掛け型の花瓶などにも多用される。

ペルーでは、ヒョウタンを利用したフクロウが作られている(写真32)。増田(1994)は、ペルーの文明の基礎を述べた中で、アンデス山脈からの河川流域のオアシス地帯に住む人々が、5500年前ごろから村落をつくり、やがてカボチャ・ヒョウタンなどを栽培したとしているので、ヒョウタンはペルーで由緒ある植物といえよう。1996年夏の仙台市博物館「黄金の都シカン発掘展」では、出店に多くのヒョウタンフクロウがあった。

7) アジア諸国

中国には、イギリスで見た木製品や、翡翠などいわゆる玉、石(写真33)、木を素材とした彫刻、七宝製品など種類が多く、日本にも相当輸入されている。筆者が観察した玉を素材とした彫り物では、両眼周りの羽毛は線で彫られているが、他の素材では彩描され、七宝では省略されている。

東南アジア諸国には、石製や木製の透かし彫りで、胴の内部にさらに一羽を彫ったものがある(写真34)。さらに草本植物の茎を束ねて作ったもの(フィリピン:写真35)や、水牛の角に彫ったフクロウ(タイ)、綿のタペストリー等がある。これらの民芸品には、ことに各々毎に特徴のある素材や技法が認められる。

一方、製造国の特定が困難な小物や雑貨、木製コースターセット、金属製鏡枠やアクセサリ・掛け等には、デザインにフクロウの体型を生かしながら、用途に対応してより一般的な製品としているのが認められる。小型のさり気ないマスコットやアップリケでは、さらに可愛らしさを印象付けるフクロウとなっていることが認められる。

6 考 察

フクロウは今日、国内・海外を問わず、ブロンズ・鉄製品・真鍮製品・陶器・石彫・木彫・ヒョウタン・編んだ植物の茎・束ねた植物の茎・(動物の)角製品として、置物・飾り物、アップリケ的な小物、ブックエンドやペーパーウエイトや朱肉入れのような文具、鏡枠・アクセサリ・掛け・真鍮の靴べら・キーホルダーなどの雑貨あるいは小物、マグカップ・ミルク入れ・

栓抜き・コースターなどの日用品、さらにタペストリーや壁画など、枚挙に暇がない程に多用され、愛用されている。これらには、民芸品や美術・工芸品が含まれている。また装飾品としてやや高級なアクセサリーも、市販されている。

このような、シンボルやモチーフとしてのフクロウの盛況は、フクロウがいわば世界的にプラスイメージの鳥となっていることを示唆している。そしてこのことには、海外においては古代ギリシャのアテナと古代ローマのミネルバという、学問・知識の女神、あるいは知恵と芸技の女神が、大きく作用しているのである。

そして国内では、宮沢賢治の童話が特に大きな役割を果たしていることは、上記の内容から明らかである。この“宮沢賢治効果”は、岩手県内において絶大であり、精神的な効果、文化としての効果など、計り知れないと考える。

筆者がここで言及しておきたいのは、フクロウにはかつてはマイナスイメージがあったとされる一面である。荒俣(1987)は、フクロウの博物誌としてほぼ世界的に凶鳥であったと詳しく述べている。たしかにこの事は、フクロウ類の生態が今日のように明らかにされ、多くの人々がこれを常識として持つようになる以前は、夜間、暗い森の中で奇異な声を発する鳥は、不吉なイメージを生んだのであろう。しかし現在では、それが大きく変化していることになる。筆者は岩手・宮城両県の山間地帯で、動物調査の一環として、地元住民を対象とする聞き取り調査を数多く実施しているが、これまでフクロウについて明らかなマイナスのイメージを聞いていない。この調査で、不思議な気味の悪い鳴き声で、正体がなにかと問われたのは、トラツグミ *Turdus dauma* (ツグミ科)である。本種は、いわゆる“ぬえ・鶇”の正体である。この質問は、これまで再三にわたって経験した。

さらにいえば、現代社会では人々が一般的に自然の事物や現象に対し、昔のようには怖れ・おのき・不安感をいだかなくなっていることが言えるであろう。とすれば、フクロウの以下のような生物的特性が、プラスのイメージの醸成に関連しているといえる。すなわちフクロウ類は、その形態が鳥類一般と著しく違っている。その違いは、ことに顔面にある。他の鳥類の顔面は前方に伸び、両眼は左右別々の側面につき、さらに顔面中央の鼻からその下方の口が前方に突出して嘴となる。これに対しフクロウ類の顔面は顔盤という名称があり、体の前面に広く平面として存在し、両眼も正面を向いている。これは、いわば人間に類似する構成である。さらにその直立した太った体型と、長く静止してたたずむ習性は、静かな、思慮深い印象を与える、と考えられる。製品としてのフクロウには、各国、各地域の特性が認められる。ギリシャやイタリアでは、やはりアテネのコインのフクロウが原点になってるといえる。そしてこの時代から、フクロウの両眼まわりには、放射状の線が細かく描かれており、それが現代の真鍮製の雑貨にまで及んでいる。この放射状の細線は、フクロウの眼のまわりの羽毛の生え方を写しとったものと考えられ、興味深い。しかし、陶器や中南米諸国の木製品などにはこの線が無く、色彩で円く描かれたりしている。またイタリアの最近の陶器などには、伝統的なフクロウ像と異なる少数の写実的な作品があり、それとは逆に概念的な類型的なものも多い。

日本のフクロウ製品には、両眼周りの羽毛を示す細線は通常ない。日本のフクロウには、古代ギリシャのフクロウの影響はほとんど認められない。

フクロウ製品には、それぞれの国と地域の特徴ある素材と手法が投射して。岩手県内の作品に鉄器が多いのは、紛れもなく南部鉄器の技術と伝統とその広がり基盤としてあると考える。鉄器はフクロウの太い体型を表現する、あるいはそれを活用して各種の製品を創作するのに、技術があれば非常に適している、と考えられる。

陶器においても、このことは同様に当てはまるであろう。

これに対して、エクアドルなどの木製のフクロウは体が細く、フクロウらしくない。これは一本の木材から彫りだすとすると、材料など色々な困難が伴うことが推測される。

笹野一刀彫のフクロウは伝統技術を活用したもので、創作者は相当に工夫をこらしたことがうかがえる。

ただし「新型こけし」には、いまのところフクロウが見当たらない。「こけし」もまた東北地方における主要な木地玩具であるが、一本の木の幹からフクロウを作り出すには、ロクロ技術は向いていないのであろう。

東南アジアにみられる石材や木材を透かし彫りにしたフクロウは、これに適した材料の存在と、さらに手先の器用さなどがあって可能になっていることが考えられる。

またタイの水牛の角や、南米ペルーのヒョウタンなども、明らかにそれぞれの国の産物の反映である。

なお、ことにフクロウとミミズクについてであるが、ヨーロッパと違って両者が識別されてきた国内でも、シンボル・モチーフにおいては、実際には両者の形態や鳴き声などでの混同・合成、あるいはイメージとしての一体化が成立していると認められ、殊更にその識別を論議するのは意味がないと結論した。

7 要 約

1. フクロウ *Strix uralensis* (フクロウ目 Strigiformes ; フクロウ科 Strigidae ; 英名 Ural Owl) その他のフクロウ類の、国内・国外におけるシンボルやモチーフとしての現状について、資料を収集し、考察した。

2. わが国では現在、ことに岩手県内を中心にフクロウをシンボルやモチーフとした置物・飾り物・民芸品・マスコット・文具・日用品などが、ブロンズ・鉄製品・陶器・木工製品・和紙面などとして製作されており、このことには特に宮沢賢治の童話と、賢治の木菟のスケッチが、大きな役割を果たしている。宮沢賢治生誕百周年の1996年には、ことにフクロウ製品が増加した。

3. 海外ではギリシャとイタリアの製品に、古代ギリシャのコインに描かれたフクロウをモチーフとしたものが目立つ。これは、フクロウがアテネの守護神 AthenaとローマのMinerva、即ち学問・知識・技術・工芸・芸術の女神のシンボルであることによる。

女神に由来するフクロウの両眼周りには、放射状の線が細かく描かれている。これは眼の周囲の羽毛の生え方を写しとって表現したものと考える。しかし日本のフクロウ作品には、このタイプはほとんど無い。

ほかにイタリアには、写実的な陶器などの小物が多い。

4. フクロウ製品は、他のヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国、中南米諸国、中国、東南アジア諸国と広く存在する。そしてことに中南米諸国、中国、東南アジア諸国の製品には、各国各地域の特徴ある素材と手法が反映している。

5. フクロウとミミズクの区別はヨーロッパにはないが、両者が識別されてきた国内でも、シンボル・モチーフにおいては、実際には両者の形態や鳴き声などでの混同・合成、あるいはイメージとしての一体化が成立していると認められた。

謝 辞

本考察に関し、国内・外の資料収集に特にご協力いただいた久保田穰氏（東京）、宮沢賢治について講話頂いた宮沢清六氏、この講話を設定された日本道路公団仙台管理局（当時）の方々、花巻市の宮沢賢治記念館の方々、盛岡高等農林専門学校（現岩手大学農学部）の卒業生である宮沢賢治の資料室の閲覧を願った岩手大学農学部附属農業教育資料館栗原守久館長（当時：農学部教授兼任；現在名誉教授）、鳥の民芸品・玩具・文具などのコレクションを拝見した伊豆沼・内沼環境保全財団主任研究員の柴崎徹博士、フクロウ・ミミズク類の最近の宮城県北西部における棲息情報と写真を提供いただいた下山安氏（日本野鳥の会宮城県支部）、珍しい笹野彫りフクロウを頂いた粕川利夫氏（仙台市青葉区奥新川“長命水”と庵を建てたカスカワスポーツ代表取締役会長）、盛岡南部藩の家紋の「向鶴」・「双鶴紋」についてお話をうかがった盛岡市中央公民館、日頃から美術・工芸品について助言いただく松井裕子氏（盛岡：第一画廊）、海外資料収集と収集品管理に協力した妻洋子に、心から感謝の意を表する次第である。

文 献

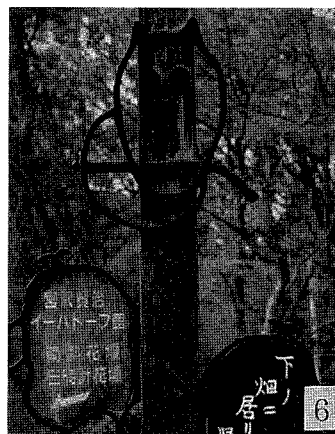
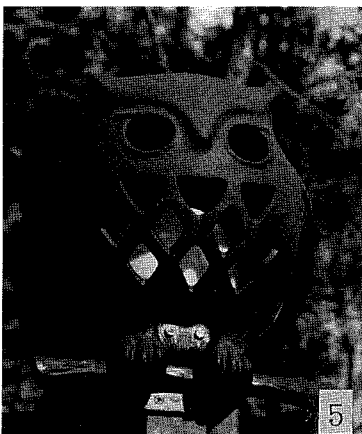
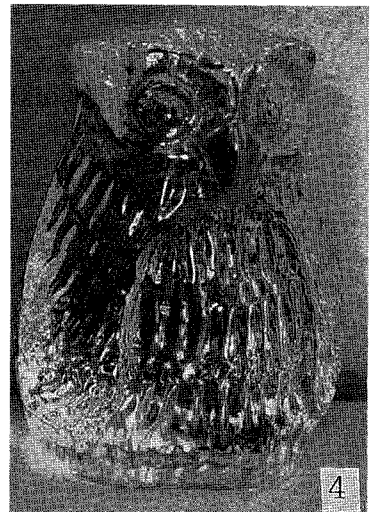
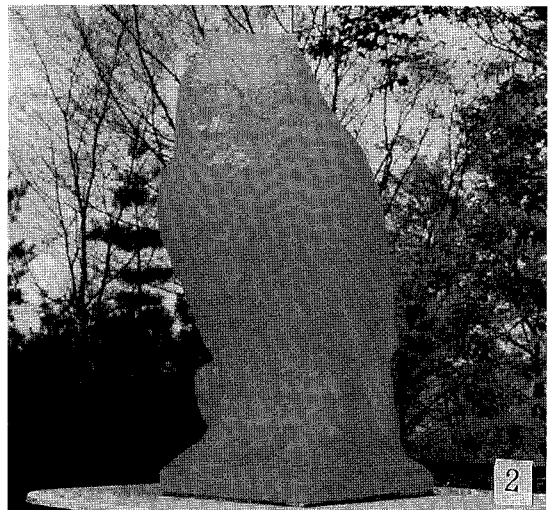
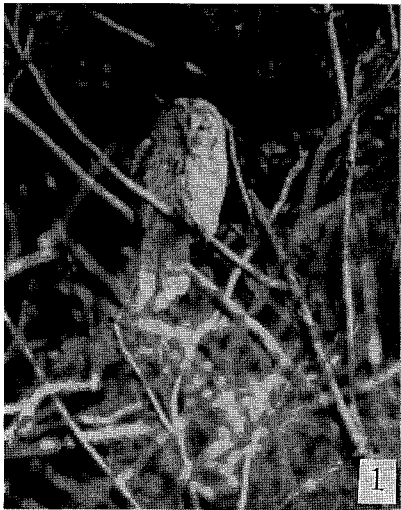
- 阿部 永ほか（1994）：日本の哺乳類。195pp. 東海大出版会。東京。
- 荒俣 宏（1987）：世界大博物図鑑4 [鳥類]。443pp. 平凡社。東京。
- Coomber R. (1991) : BIRDS of THE WORLD. 240pp. CLB. 2422.
- 遠藤君男（1987）：コノハズク・オオコノハズク・フクロウ（フクロウ科）。岩手の鳥獣百科（223 pp.）。98-100. 岩手日報社。盛岡。
- Ferix, J. (1991) : The Illustrated Encyclopedia of Birds. 320pp. Treasure Press. London.
- 長谷川奏・藤田礼子・長崎由美子・菊地敬夫（1994）：用語解説集。吉村作治監修・国立カイロ博物館・古代エジプト文明と女王。118-125。
- 岩手大学野鳥の会（1977）：創立十周年記念誌。132pp. 岩手大学学友会内。
- 清棲幸保（1978）：増補改訂版日本鳥類大図鑑Ⅱ。898pp. 講談社。東京。
- 国松俊英・藪内正幸（1996）：宮沢賢治 鳥の世界。285pp. 小学館。東京。
- 葛精一監修（1975）：岩手の鳥獣。274pp. 岩手県環境保健部自然保護課。盛岡。
- 増田義郎（1994）：中央アンデスの古代文明。黄金の都シカン発掘展(199pp.)。20-25. TBS。東京。
- 宮沢賢治（1996）：ビジテリアン大祭。245pp. 宮沢賢治作品集。角川文庫クラシックス。
- 宮沢賢治（1996）：注文の多い料理店。234pp. 宮沢賢治作品集。角川文庫クラシックス。
- 中村 茂（1987）：シマリス（リス科）。岩手の鳥獣百科（223pp.）。p.206. 岩手日報社。盛岡。
- 新村出編（1969）：広辞苑。244pp. 岩波書店。東京。
- 日本野鳥の会宮城県支部編（1992）：宮城の野鳥。249pp. 河北新報社。仙台。
- 小野泰正・多田元彦・戸沢俊治（1981）：自然環境保全地域生態系調査報告書。231pp. 岩手県。
- 小野泰正・多田元彦・戸沢俊治・草間俊一（1982）：環境緑地保全地域生態系調査報告書。155pp. 岩手県。
- 高野 昭（1991）：バードウォッチャーが見た記紀の鳥。鳥の日本史。38-48. 新人物往来社。

東京。

高野伸二監修（1981）：日本産鳥類図鑑。474pp. 東海大学出版会。東京。

高野伸二（1985）：日本の野鳥。591 pp. 山と溪谷社。東京。

高野伸二（1989）：増補版フィールドガイド日本の野鳥。342pp. 財団法人日本野鳥の会。
東京。



写真説明は
本文参照

